掲載日：2017年03月14日，面名：特集１，記事ID:KIJ20170314_A0004000101E32001

(C)沖縄タイムス社

心育む学び追究

第54回タイムス教育賞 21日贈呈式・祝賀会

第54回沖縄タイムス教育賞に、県内の学校現場や地域で優れた研究、実践活動を続ける２氏１団体が選ばれた。受賞者の活動と抱負を紹介する。

贈呈式・祝賀会は21日午後６時半から、那覇市のかりゆしアーバンリゾート・ナハで。会費は一般５千円。高校生３千円、中学生以下は無料。問い合わせは沖縄タイムス社文化事業局、電話098（860）3588。

慣例超えて理論実践

幼稚園教育

村吉和美さん　那覇市立古蔵幼稚園主幹



園児が植えた花を一緒に眺める村吉和美主幹＝９日、那覇市立古蔵幼稚園

むらよし・かずみ　1956年那覇市生まれ。沖縄キリスト教短期大学卒業。77年、那覇市立幼稚園で初任。教育庁などを経て、現職。県内外で講演もする。

「子どもの最善の利益のため」が大前提。40年間、常に念頭にあった思いだ。

「幼児期は人格形成の基礎が育つ」ため、植物や動物などの自然が身近にある環境や遊び空間をつくり、子どもの個性や感性豊かな心の育成を図る。90分の外遊びをいち早く取り入れ、慣例だった10時のおやつを廃止すると、朝食や昼食をしっかり食べ、小学生の生活リズム習得にもつながった。「私たちは専門職であり研究者。遊びや活動の中に教育の意図を含めながら、発達に合わせた環境をつくるのが役目」と、理論と実践を重ねてきた。

３年前に赴任した古蔵幼稚園では、古蔵小学校や域内の保育園の先生が集まる連絡協議会を設立。園児の様子を公開し、それぞれの教育の成果や課題について共有する。

「教育は成果が出るまで時間がかかる。共有することで、その子に合った方法を長い目で考えられる」。園庭のない保育園で走り回れず、体力に課題があることが分かると、敷地に恵まれた幼稚園で改善を試みた。「地域で育てるという思いがあれば、同じ方向に向かっていける」と話す。

県教育庁に出向した時には、全県的な取り組みとして、アメリカ統治下の影響で通例だった１年保育を３年にするよう推進。３年での教育を示す日本の幼稚園要領を、県内では１年で終える必要があったためだ。現在、県内各地で２年保育をする園が増え、４月には那覇市でも初めての３年保育が実施される。「ようやく、幼児教育の重要性が認知され始めた」と頬を緩める。

今月末には定年で現場を離れるが、「社会情勢で変えるべき部分も出てくる一方、変えてはいけない部分もある。幼児教育における不易流行の本質を伝えたい」と、大学などでの後進の養成に意欲を見せる。

地域生かし体験の場

幼稚園教育

池田哲子さん　石垣市立あらかわ幼稚園教諭



ドッジボールを楽しむ園児たちに囲まれ笑顔を見せる池田哲子教諭（中央奥）＝石垣市立あらかわ幼稚園

いけだ・てつこ　1957年竹富町鳩間島生まれ、石垣市在住。沖縄女子短期大学卒。83年に市立のそこ幼稚園で初任。2007～11年は同市教育委員会の指導主事。15年から現職。

「先生、あの虹ってどっから出てるの？」。そんな園児の素朴な疑問に「じゃあ、見に行こうか」と返し、保護者に頼んで海まで車を走らせた。海辺に近い幼稚園では気温が下がった冬場、仮死状態で浜に打ち上げられた魚を園児と拾い集めて並べ、図鑑で調べた。

重視してきたのは、子どもの五感に訴える実体験を通した学びの実践。園児の「気付き」を大切にし、地域特性を生かした遊び・学びの場を一緒に楽しみながら「子どもたちの心に揺さぶりを掛ける」。それが感性を育み、探求心や豊かな心につながる―と考える。

幼児教育に携わって38年余り。日々感じるのは「学びの場は足元にある」ということだ。園児を取り巻く環境や人、物との関わりを学びの中にどう取り入れられるか。地域を幼稚園とつなぎ「生かす」のも自身の役目だと考え、実践した。

「地域と園をつなぐというのは、子どもたちをつなぐということ。そうすれば地域の人たちは園児にもっと目を向けて、一緒に子育てしてくれる。大事なのは言葉掛け。こちらが一歩踏み出せば応えてくれる」

幼稚園教育は「教科書がないゆえに教師の役割が大きい」。だからこそ、子どもたちの「気付き」を受け止めたり、導いたりする上で教師自身が感性を磨くこと、「一緒に楽しむ」ことも大事だと強調する。

石垣市教育委員会の指導主事だった５年間は、生活リズム向上や食育の啓発に尽力し、昔話を扱った教諭向け冊子の作成や研修、童歌の普及など地域の伝統文化の継承にも力を入れた。

後進の指導で心掛けているのは、知識や経験を伝えるだけでなく人と人とをつなぐこと。「私が今あるのも子どもたちと一緒に育ててもらったから。それを次の人に伝えることで恩返しになれば」とほほ笑んだ。

講評　活発な実践・研究から成果

武富和彦審査委員長

市町村教育長、学校長などから推薦されただけあって、応募があった８件はいずれも活発な実践、研究に取り組み、優れた成果を上げていることが示されていた。特に優れた２個人、１高校を受賞者として決定したが、半世紀余の歴史を刻むタイムス教育賞にふさわしく、選考委員を代表して心から祝辞を贈りたい。

村吉和美氏、池田哲子氏は幼稚園教育分野で認められた。同分野からは前年度に28年ぶりの受賞者が出た経緯があり、それが励みとなって応募、受賞につながったのではないかと喜んでいる。２氏は地域特性や課題を踏まえ、幼児教育をリードする実践、研究を継続してきた。就学前に竹馬やバケツ稲づくりなどの遊び、体験を通して生きる力を身につけさせたほか、実践効果を分析し、その成果を広く後進指導に生かす取り組みも評価された。

名護商工高校地域産業科観光コースは、タイムス教育賞では初めてとなる専門高校学科の受賞となった。「観光は平和産業である」という視点に立脚し、戦争体験者からの聞き取り、戦跡めぐりなどのフィールドワークのほか、成果をまとめ地域の小中学校へ出向いて講話をするなど、アクティブな平和学習が評価された。沖縄のリーディング産業である観光業従事者を育てる学校現場の独創的な取り組みであり、さらなる挑戦にも期待したい。

教育現場では、先生や保護者がたくさんの愛情を注ぎながら子どもたちと向き合っている。子どもを伸ばすための創意工夫、関係者との連携、取り組み継続のアイデア、そして、子どもたちに見られた変化など教育的考察を深めた上で、タイムス教育賞に応募することを願いたい。

（沖縄タイムス社常務取締役文化事業局長）

平和継承へ出前講座

その他学校教育の向上

名護商工高校の地域産業科観光コース



平和学習に取り組む名護商工高校地域産業科観光コースの生徒

観光に従事することは平和に従事すること。そう考える名護商工高校地域産業科観光コースは、独自の平和学習に取り組む。戦争体験者に学ぶだけでなく、年下の小中学生に受け継ぐ出前講座を昨年、始めた。

主体は２年生18人。体験者と戦跡を巡った後、「平和のためにできること」を中心に発表の内容を議論した。古謝瑠乃さんは「やりがいはあるけど大変だった」と振り返る。北部の小中８校を訪ね、合計で約500人を前に発表した。

比嘉昇依さんは武器や軍隊の用語は「通じない言葉が多い」と気付いた。伝え方を工夫した結果、感想文に「けんかしないように頑張る」と書いた小学生もいた。比嘉琴乃さんは「小さくてもよく考えている」と、伝える喜びを感じているようだ。

これまでも戦争体験者の講話は依頼していた。観光コース長の上里勝紀教諭は「伝えようとすると考えが深まる。発表し、質問に答えていくうちに生徒がすごく成長した」と実感する。

まだ始まったばかりだが、旅行社から県外の修学旅行生を対象に発表してほしいという依頼もあった。新年度以降の実施を検討している。功刀弘之教頭は「語り部はどんどん減ってしまう。取り組みが全県の学校に広がれば」と願う。

発表のスライドには「次の平和の語り部は私たちです！」という一文がある。山城萌さんは「悲しいことがあったというだけでなく、二度と起こさないように次の世代に伝えることが大事だと思う」と語る。

仲尾仁奈さんは「命どぅ宝」という言葉を「全ての命は平等に大切」と読み解く。「トランプ米大統領は多様性を認めないからメキシコともめる。尊重し合うことが平和につながる」。そう語り、同級生が皆うなずいた。